

対話・討論・考える、ということについて

総合リハビリテーション学会長

高見 正 利

先に行われた大学祭で、学生諸君が自ら開催した発達障害の方の講演を聴講する機会がありました。当事者でもある講師の先生は、目から入る情報や音などの刺激に対して感覚器官の感受性や受け止め方が多くの人とは違う場合が多い、と話しておられました。障害を持つ児童が、動物園での写生会で、大きく目立つお尻の象を描いたそうです。先生が象を選んだ理由を尋ねると、象ではなくて背景の象舎の小さな窓がカラフルなので、それに興味がわいたと期待に反した答えが返ってきたそうです。興味が特異な1点に集中していたのです。その子は興味の向かう方向が違うので、話者とは全く違う理解となって、話がかみ合わなく、非常識と受け取られることも少なくないということでした。具体的に話してもらおうとその子はよく理解するのだそうです。このように受け取る側の背景や感受性が異なることがあり、それへの配慮によってコミュニケーションが成り立つことに大変興味を持ちました。

さて、良くも悪くも情報化が進み、世界を狭く身近なものにしていきます。私たちと世界とのつながりが深くなってくると、ますます多様な人々と交わることが多くなり、以前よりも柔軟で豊かなコミュニケーション力が求められるようになります。

本学の教育理念の一つとして、グローバルな視野に立ち、高度な学理の修得、が謳われています。ここでいうグローバルな視野とは、広い視野に立ち、多様な価値観や行動様式を持つ人々を理解し、また自分をよく理解してもらうための力を育てるということでしょう。近年、よく叫ばれるグローバル化をすすめるということとはちょっと違うと思います。確かにグローバル化は世界各地に強い影響力を及ぼしています。巨大で複合的な多国籍企業が世界各国の行政や仕組みにまで影響を及ぼしているように、資本力があるものはますますそれを増やしていく状況が出来上がってきています。規模を大きくして効率化を進めているのですが、それは価値観や判断基準を一元化して、人々の行動様式を規格化していくことにもつながります。そうした仕組みを受け入れることができないと、またそのルールに乗ることができないと排除される恐れが生じてきます。そして異種の考え方や行動をする人が排除されるようになってしまうと、個々の人を尊重しようとする姿勢は維持されにくくなるでしょう。そうはいっても、私たちは社会の一員であるという制限を受けます。自分だけが良くても、社会全体の調和がない限り、落ち着きのない不安定な状態に置かれます。その結果、社会全体で見た時にコストも増大していきます。

どうしたらいいのでしょうか。やはり、相手の背景や考え方を異種だからと反射的に拒絶し

てしまうのではなく可能な限り理解して、自分の考えは伝わるように説明して一致点を探し築いていく工夫が求められるのではないのでしょうか。そのためには、対話や討論の習慣が力になるでしょう。対話を拒否するのではなく、対話を通じて相手から影響を受けて、自分が変わり相手も変わっていく、お互いの変化によって関係も変わっていくという柔軟な姿勢や行動が必要となっていくでしょう。

対話と討論は、他者の目を通して自分を振り返えるきっかけとなり、そのなかで、論理的なものの考え方を鍛え、相手の理解を得やすくします。本学会の学術集会もこれをトレーニングする場となっています。さらに付け加えますと、これを自分の中で行う、つまり対話の主体と客体を自分の中で演じること、それが考えることとなります。そうすることで自分の存在を確かなものにすることができます。よく考える人が増えれば、障害を持つ人や今働く場のない人の活躍する機会が増えていくでしょう。

2013. 12. 22